

ヨハネ11章

導入

今日初めて来られた方や、5月24日以降に OIC に来始めた方々のために、これまでのヨハネの福音書の学びを振り返りましょう。

3月1日から、ヨハネの福音書の学びを始め、祈りについての学びに入る前にヨハネ1章から10章まで学び終わりました。

今日からヨハネの福音書の学びに戻りますが、このたびは、17章まで毎週つづけて学ぶ予定です。

1-10章までの学びのおもな重要ポイントをここで振り返りましょう。

1. ヨハネの福音書の全体のテーマと目的は、20：30-31にまとめられています。
20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。**20:31** しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によつていのちを得るためである。
2. ヨハネの福音書には、イエス・キリストが公生涯の中で行われたしるしが多く登場します。これらのしるしは、イエスが人の姿をした神であることを証明します。弟子たちを始め多くの人々がしるしを目撃しました。ヨハネは、この福音書の読み手、聞き手がイエス・キリストを救い主であり主として信じ、イエスの名にある「新しいいのち」を受けることを望んでいます。
3. 冒頭の1-18節は、福音書の中にどのような内容が記されているかの予告編です。ここを改めて読むのもよいかもしれません。
4. 3章では、宗教が人を救えないことを学びました。神の国に入るには、「新しく生まれる」必要があります。
5. 4章では、5人の夫を持つ罪深い生き方をした女性にもこの新生が提供されていることがわかりました。
6. 5章では、人は暗闇の中に生きていますので、私たちが罪を示されて暗闇から救い出されるには、神の光が必要であることを学びました。
7. 6章では、イエスがご自身を「天からのパン」に例えておられます。イエスのご自身がいのちのパン、生けるパンだとおっしゃいます。このパンを食べる者は決して死ぬことがないとおっしゃいました。
8. 7章では、イエスが「仮庵の祭り」で、「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と叫ばれました。イエスを信じるなら、その人の心から生ける水の川が流れ出ると約束されました。これは、後に与えられる聖霊についての約束です。

9. 8章では、イエス・キリストの弟子になりたいなら、イエスのことばに「とどまらなければならない」と教えられました。神のみことばである聖書に忠実であるという意味です。
10. そして10章では、イエスが「まことの牧者」とであると学びました。これに対し、偽りの牧者は人の期待にこたえられない宗教を説きます。

イエスは、「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。」とおっしゃいました。

10章で、イエスはご自身が神と対等であると宣言され、奇跡をとおして多くの証拠を提供されました。ここでこのシリーズの学びをいったん中断しました。

ユダヤ人はイエスを捕らえようとしたが、イエスはそれを逃れてヨルダン川の向こうに移動されました。そこは、ヨハネが洗礼を授けていた場所です。エルサレムからはずいぶん離れた場所でした。

ではこれから、ヨハネの福音書11章の学びに入ります。今日は11章全部を学びますので、まず11章をお読みしましょう。

11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。 11:2 このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。 11:3 そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」 11:4 イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」 11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。 11:6 そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。 11:7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。 11:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」 11:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまずくことはありません。この世の光を見ているからです。 11:10 しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにないからです。」 11:11 イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」 11:12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」 11:13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。 11:14 そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。 11:15 わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいますが、さあ、彼のところへ行きましょう。」 11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」 11:17 それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。 11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。 11:19 大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところに來ていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。 11:20 マルタは、イエスが來られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。 11:21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死な

なかったでしょうに。11:22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」11:24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」11:27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」11:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。11:29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。11:30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。11:31 マリヤとともに家において、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女について行った。11:32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」11:33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、11:34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」11:35 イエスは涙を流された。11:36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」11:37 しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。11:38 そこでイエスは、まとも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。11:39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょ。四日になりますから。」11:40 イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」11:41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。11:42 わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」11:43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」11:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」11:45 そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。11:46 しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。11:47 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くをしるしを行っているというのに。11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」11:49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。11:50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」11:51 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、11:52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。11:53 そこで彼らは、その日から、イエスを

殺すための計画を立てた。 **11:54** そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。 **11:55** さて、ユダヤ人の過越の祭りが間近であった。多くの人々が、身を清めるために、過越の祭りの前にいなかからエルサレムに上って来た。 **11:56** 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って、互いに言った。「あなたがたはどう思いますか。あの方は祭りに来られることはないでしょうか。」 **11:57** さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は届け出なければならないという命令を出していた。

11章の学びに入る前に、旧約聖書の関連箇所をまず調べておきましょう。そうすれば、聖書の話の展開にこの箇所がどうはまるのかがわかりやすくなるでしょう。聖書は66巻から構成される一冊の本です。そのひとつひとつがパズルのように合わさって、聖書の全容が明らかになります。それは、イエスにあらわされる全体像です。

ヨハネ11章は、生と死についてです。

創世記3章から始まって、旧約聖書の大きなテーマは生と死の問題です。

しかしイザヤは、「死」が永遠に飲みこまれる日を待ち望みます。（イザヤ25：6-8）

旧約聖書でもうひとつ私たちが覚えておく必要のあることがあります。それは、身代わりという考え方です。

レビ記16：1-11

16:1 アロンのふたりの子の死後、すなわち、彼らが【主】の前に近づいてそのために死んで後、【主】はモーセに告げられた。 **16:2** 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの兄アロンに告げよ。かつてな時に垂れ幕の内側の聖所に入って、箱の上の『贖いのふた』の前に行ってはならない、死ぬことのないためである。わたしが『贖いのふた』の上の雲の中に現れるからである。 **16:3** アロンは次のようにして聖所に入らなければならない。罪のためのいけにえとして若い雄牛、また全焼のいけにえとして雄羊を携え、 **16:4** 聖なる亜麻布の長服を着、亜麻布のももひきをはき、亜麻布の飾り帯を締め、亜麻布のかぶり物をかぶらなければならない。これらが聖なる装束であって、彼はからだに水を浴び、それらを着ける。 **16:5** 彼はまた、イスラエル人の会衆から、罪のためのいけにえとして雄やぎ二頭、全焼のいけにえとして雄羊一頭を取らなければならない。 **16:6** アロンは自分のための罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。 **16:7** 二頭のやぎを取り、それを【主】の前、会見の天幕の入口の所に立たせる。 **16:8** アロンは二頭のやぎのためにくじを引き、一つのくじは【主】のため、一つのくじはアザゼルのためとする。 **16:9** アロンは、【主】のくじに当たったやぎをささげて、それを罪のためのいけにえとする。 **16:10** アザゼルのためのくじが当たったやぎは、【主】の前に生きてままで立たせておかななければならない。これは、それによって贖いをするために、アザゼルとして荒野に放つためである。 **16:11** アロンは自分の罪のためのいけにえの雄牛をささげ、自分と自分の家族のために贖いをする。彼は自分の罪のためのいけにえの雄牛をほふる。

レビ記17：11

17:11 なぜなら、肉のいのちは血の中にあるからである。わたしはあなたがたのいのちを祭壇の上で贖うために、これをあなたがたに与えた。いのちとして贖いをするのは血である。

神の民から罪を取り除くためには、何か他のものが身代わりに死ななければなりません。こうすることで、罪に対する神の義なる怒りが治まったのです。

レビ記16章で、イスラエルの民の罪はいけにえのヤギにかぶせられ、そのヤギは殺されました。レビ記17：11は、私たちの命を贖うのは血であると説明します。

贖いとは覆うという意味です。私たちの罪が覆われることで、神はそれをご覧になることがなくなります。

後に預言者イザヤは49章と53章で、神のしもべがこの世にやってきて、多くの人々の代わりに死ぬことを予見しました。

これらのことを念頭に、ヨハネ11章の学びに入りましょう。

11章全体を4つの部分にわけて学んでいきたいと思います。

まず、ヨハネ11：1-16です。

1. ラザロを死からよみがえらされた目的 (1-16節)

ラザロを死からよみがえらされた目的はおもに2つあります。

- a) 第一に、神の栄光のためです。4節を読むと、ラザロの死が神の栄光のためだとイエスは二度おっしゃいます。

人の死がどのようにして神に栄光をもたらすことができるのでしょうか。その答えは、話の続きを見れば簡単です。死んだ人が生き返りました。死んだ人が生き返る以上に神に栄光をもたらすことはないでしょう。

私たちの生きる現代社会では、医療があらゆる素晴らしいわざをなせます。

人工股関節や人工膝関節、心臓バイパス、腎臓移植など、手術であらゆる治療が可能です。

心肺停止状態の人に人工呼吸器を装着すれば延命することが可能です。しかし、人工呼吸器を外せばその人は死にます。

しかし、今の医療にできない、また今後も不可能なことがあります。それは、完全に死んでしまった人をよみがえらせることです。

神が確実に栄光をお受けになるために、イエスはラザロが重病だと聞いてもその場所に2日間留まりました。

奇跡やできごとについて人間には不可能だとわかっているときこそ、神は栄光を受けられます。

神は人の心をご存知です。そして、神はご自身の栄光を人や他のものと分かち合うことはなさいません。

ラザロを復活させることで、神は栄光をお受けになり、イエスはその栄光を神と分かち合われます。それは、イエスが神とひとつだからです。

神の栄光とは、神の力の啓示と言えるでしょう。

ユダヤ人たちは、エジプトから助け出され、荒野ですべての必要を満たされて、約束の地に導かれました。約束の地では、民の代わりに神ご自身が戦い、その地を占有する神の敵たちを征服されました。彼らは神の栄光を目の当たりにしたわけです。

b) ラザロを死からよみがえらされた目的のふたつめは、弟子たちの信仰を強めるためです。(14-16節)

弟子たちはイエスを信じていましたが、まだまだ学ぶべきことがたくさんありました。イエスは彼らの「信仰」が成長することを望まれました。

どのような小さな奇跡でも、イエスを信じる「信仰」を強める役割を果たします。

16節で、トマスは非常に悲観的です。彼の信仰は強められる必要がありました。

旧約聖書の一例

列王記第一18：22-39のお話を覚えておられるでしょう。

18:22 そこで、エリヤは民に向かって言った。「私ひとりが【主】の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。18:23 彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけないでおく。18:24 あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は【主】の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。」民はみな答えて、「それがよい」と言った。18:25 エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたがたで一頭の雄牛を選び、あなたがたのほうからまず始めよ。人数が多いのだから。あなたがたの神の名を呼べ。ただし、火をつけてはならない。」18:26 そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアルの名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。18:27 真昼になると、エリヤは彼らをあざけて言った。「もっと大きな声で呼んでみよ。彼は神なのだから。きっと何かに没頭しているか、席をはずしているか、旅に出ているのだろう。もしかすると、寝ているのかもしれないから、起こしたらよかろう。」18:28 彼らはますます大きな声で呼ばわり、彼らのならわしに従って、剣や槍で血を流すまで自分たちの身を傷つけた。18:29 このようにして、昼も過ぎ、ささげ物をささげる時まで騒ぎ立てたが、何の声もなく、答える者もなく、注意を払う者もなかった。18:30 エリヤが民全体に、「私のそばに近寄りなさい」と言ったので、民はみな彼に近寄った。それから、彼はこわれていた【主】の祭壇を建て直した。18:31 エリヤは、【主】がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる」と言われたヤコブの子らの部族の数にしたがって十二の石を取った。18:32 その石で彼は【主】の名によっ

一つの祭壇を築き、その祭壇の回りに、二セアの種を入れるほどのみぞを掘った。18:33 ついで彼は、たきぎを並べ、一頭の雄牛を切り裂き、それをたきぎの上に載せ、18:34 「四つのかめに水を満たし、この全焼のいけにえと、このたきぎの上に注げ」と命じた。ついで「それを二度せよ」と言ったので、彼らは二度そうした。そのうえに、彼は、「三度せよ」と言ったので、彼らは三度そうした。18:35 水は祭壇の回りに流れ出した。彼はみぞにも水を満たした。18:36 ささげ物をささげるころになると、預言者エリヤは進み出て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、【主】よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなただけのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行ったということが、きょう、明らかになりますように。18:37 私に答えてください。【主】よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、【主】よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」18:38 すると、【主】の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった。18:39 民はみな、これを見て、ひれ伏し、「【主】こそ神です。【主】こそ神です」と言った。

2. 奇跡の重要性 (17-37節)

これらの個所で、この奇跡の重要性がわかります。イエスがエルサレムの近くのベタニヤに到着されたとき、ラザロは死んでもう4日になると知らされました。そのとき、人々は悲しんでいました。マリヤとマルタの友人たちは、ふたりのためにそこに集まっていました。

イエスが来るとすぐにマルタがイエスに話しかけます。

マルタは、ラザロがまだ生きていた時にイエスが来られたなら癒すことができになっただろうと言って、イエスの力を強く信じています。22節で、ラザロが死んでしまった後でも、イエスが求めることは何でも神は与えてくださるとマルタは信じていました。

23節で、イエスはマルタに、あなたの兄弟はよみがえるとおっしゃいました。

マルタは、終わりの日にラザロがよみがえると信じていると返答しました。その考えは正しかったのですが、それに対してイエスはマルタの予想していなかった返答をなさいました。

イエスはおっしゃいました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」

そして、マルタに、「このことを信じますか。」と問いかけられました。

27節で、マルタは信じると答えました。

ここに、私たちが問いかけなければならない問いがあります。

「私たちは信じるのでしょうか。」私は信じます。あなたはいかがですか。

イエスはここで、人類最大の問題、つまり死に対する神の答えがご自身であるとおっしゃいました。

イエスが与えるいのちとは一体どういうものなのだろうとっておられるでしょうか。このいのちをどのようにして与えてくださるのだろう、イエスがよみがえりとはどういうことか、など、疑問をお持ちですか。

こういった疑問を解決するには、これから数カ月間 OIC に来てみてください。そうすれば、その答えがわかるでしょう。

その答えが12-21章で明かされます。

では、この奇跡のふたつめの重要性に話を進めます。

33-36節で、ラザロの死に際してイエスが義なる憤りと悲しみを示されました。

この個所で、イエスは死による悲しみや痛みを現されました。

この短い数節で、神であり人であるお方は、愛する人を亡くした人々の心に寄り添われました。

35節には、「イエスは涙を流された。」とあります。それがすべてを物語っています。

33節は、イエスが霊の憤りを覚えて心の動揺を感じたと語ります。

イエスにはこの経験が必要でした。それは、ご自身の悲しみの体験をとおして、人々を愛し助けることができるようになるためです。

私たちがイエスを救い主として信じて愛すると、親しい間柄のようにイエスのもとに来て悲しみを打ち明けることができます。私たちの感情のすべてをイエスがわかってくださるという確信を持てます。

イエスはまるで、「死はあるべきではない、耐えられないものである」と言っておられるようです。

イエスと私たちの違いは、イエスにはこの家族にしてあげられることがあったという点です。私たちがイエスを信じるなら、将来直面する死についてイエスは私たちにも何かをしてくださるでしょう。

3. 次に「奇跡」そのものについてです。(38-44節)

この奇跡は、死んだ人が生き返ったのですから非常に劇的な奇跡です。しかし、その過程に関わったものはいたって単純です。まずマルタの信仰、次にイエスの信仰があり、次いで神の力があって死んだ人が生き返りました。

ラザロはほら穴に埋葬され、入口は大きな石で閉ざされていました。当時としては一般的な埋葬方法です。イエスが、入口を塞いでいる石をのけるようマルタに言うと、マルタは、ラザロが死んで4日も経つので臭くなっていると行って反対しました。

イエスは、マルタが神の栄光を見ることを本当に信じているかどうか試されたのです。

その石は、マルタ一人で動かすには大きすぎました。私はイスラエルに行ったとき、入口が石で閉ざされた埋葬場所を見ました。この石を動かすには、おそらく数人がかりだったでしょう。

マルタは結局、石をのけてもらいました。

ここでイエスは、人に聞こえるような声で神に祈ったようです。これまででもっとも偉大な奇跡を起こすというときに、イエスは、ご自身が正真正銘の「神の子」であることを人々に知ってほしいと望まれました。

そしてイエスは大声で叫ばれました。「ラザロよ。出て来なさい。」

ラザロは埋葬のための布で包まれたままの姿で洞穴から出てきました。これは、死者を包む絹です。

4. 奇跡の結果 (45-54節)

この偉大な奇跡の結果、ふたつのことが起こりました。一方は肯定的なもので、他方は否定的なものです。45節には、この奇跡を目にした多くのユダヤ人がイエスを信じたとあります。

一方、46節には、何人かの人たちはその場を離れてパリサイ人のところへ行き、ラザロの復活について話したとあります。

すると祭司長とパリサイ人たちは議会を開きました。自分たちの権力や権威を守ろうとしたのです。53節には、彼らがその日からイエスを殺すための計画を立てたとあります。

これが原因で、イエスはユダヤ人の間を公然と歩くのをやめ、エルサレムを離れてエフライムという町に行き、弟子たちと過ごしたと記されています。

この個所で注目すべきことがひとつあります。それは、大祭司カヤパの預言です。それは49-52節に登場します。

49-50節にあるカヤパのことばを一読すると、単にイエスへの対処法に関する政治的な意図を含んだ発言のように思えます。

カヤパは、イエスひとりが殺されるほうが、イスラエルの民全体が政治的な騒動に巻き込まれるよりもましだと言いました。

しかし、ヨハネは51節で、イエスが身代わりとなって死なれることをカヤパの提案が預言する結果となったと指摘します。

ここで始まった企ては、神の小羊であるイエスがユダヤ人だけでなく多くの国民の代わりにご自身のいのちをささげるできごとへとつながったのです。

11章を、どのように私たち自身に当てはめればよいでしょう。

1. ラザロの復活を目撃した当時の人々にとって、その教えは明らかです。1-15節で、その奇跡は神の栄光のためであったとあります。また、弟子たちの信仰が強められるためであったこともわかります。

マルタは、最後の日にイエスが復活をもたらされることを信じていました。一方、イエスは、ご自身を今信じる人々に永遠の命をもたらすためにやってこられたことを示されました。イエスを信じる信仰によって、死の恐ろしさは無効とされました。人は死にます。しかし、もはや死のない場所で永遠に生きることができるのです。

2. 現代の私たちにとっても同様のことが言えます。イエスが罪の影響に対処し、死の恐ろしさを無効にすることのできる唯一のお方であることを私たちは喜ぶことができます。イエスは今すぐに私たちにいのちをもたらしてください。それは、十字架上でイエスが私たちの身代わりに死んでくださったおかげです。

この聖書箇所を学んで私たちの信仰も成長すべきです。イエスを信じるなら、もはや死を恐れる必要はありません。私たちの死は、永遠の命への入口です。罪の影響は完全に無効とされました。

アメリカの黒人ブルース&ジャズ作曲家トム・デラニーは、1947年ごろにある曲を作曲しました。その歌詞は「みんな天国に行きたがるけど、誰も死にたがらない」というものでした。

しかし、天国に行くたったひとつの道は、死を通り抜けることです。

イエスの死が私たちの罪の身代わりのものであることをまず信じることです。イエスは私たちの代わりに死んでくださいました。私たちが受けるべき罪の罰を負ってくださったのです。

次に、死ぬときに備えることです。それは、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」というイエスのことばを信じることです。